

市場メカニズム、競争原理など、使う人がそれぞれまちまちのイメージで論じていては、議論はかみ合わない。さらに同一人が、同じ言葉をT. P. O. に応じていろいろの意味に使いわけると、たとえば競争などという概念はまさしくバナシア（万能薬）になりかねない。価格が売れ行きに拘らず硬直的な産業について、自由な価格機構といっても、論者の言わんとするところはわかるような気もするが、いま一つ釈然としない。経済学者である以上、実態をよくみつけ、言葉の使い方には注意深くありたいものである。

<コメント>

(森宏所員)

今回、森宏所員からお寄せいただいた論文の内容は、去る6月18日、当社研の定例研究会で同所員に御報告いただいたものです。価格メカニズム、市場メカニズム、競争原理といった言葉を一般に経済学者がパラレルに用いるのは、ときにミスリーディングな解釈を生むのではないかという指摘には研究会に参加した者にとっても新鮮な響きがありました。経済理論の基本的な骨格は完全競争を前提にした静態的価格理論にあるわけですが、その諸前提の多くは、農業経済を想定することから得られています。大量生産技術を軸にして発達してきた近代の経済社会における「市場メカニズム」が、はたして純粋な価格理論のフレームワーク（理念型）で捉えきれるのか、競争の効果を描き出すもっと別の市場理論の構築が要請されるのか、そしてそれは伝統的な価格理論と本質的にどう違うのかといった問題群を、森所員の話聞きながら次々と連想したことです。競争メカニズムの意義にかかわるこれらの問題を考えていくうえには、おそらく静態理論の枠を超えて何らかの動態的なプロセスについての仮説を立てることが必要となってくると思われまふ。そして案に違わず、森所員の指摘にも見られるように「日本の農業政策に市場原理の導入を」図った場合にも静態的な価格理論のみで判断できない、異なった可能性が考えられることとなります。つまり、「価格メカニズム」によって米価が下がったとき、「競争メカニズム」が働いて、日本の米作は経営能力の高い農民によって蘇生するのか、「貧すれば鈍する＝いじめられればポシヤる」だけに終わるのかという2つの可能性です。

「価格メカニズム」についての知識だけでは、「市場の原理」を導入したときの可能性を確定的に占うことができません。いずれかの可能性を主張するということは、「競争メカニズム」にさらされる日本の農業の環境と、それを支える農家の資質とについての総合的な「読み」

が込められているということになります。「蘇生する」も「ポシヤる」も市場の原理が働いたためと言わざるを得ないとしたら、一体市場メカニズムとは何なのか。「価格メカニズム、市場メカニズム、競争原理といった言葉は注意して使いましょう」と自戒の意を込めて森所員が報告を締めくくられたことを念のため記しておきます。

(研究会担当 池本正純)

〔編集後記〕

社研メンバーとして、しばらく休眠を決め込んでいたら、突然、編集担当として積極的に貢献するようにとのご要請を受け大いにあわてている。

本号では、森所員の興味深い論文と、それに対する池本所員の的確なコメントをお届けすることができます。社研の研究会での活発な活動が、月報の成果にも反映され、さらにいっそう波及効果が拡大されていくことは研究所の望ましい姿といえるでしょう。

大学の講義も間も無く夏休みに入ろうとしており、今から編集子としては、休み明け十分に充電された所員の皆様から多くの投稿を心待ちにしています。

(F. T)

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話(044)911-8480(内線33)

専修大学社会科学研究所

(発行者) 三輪芳郎

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話(03)404-2561
